

## 「コリント教会へのパウロの手紙」のポイント

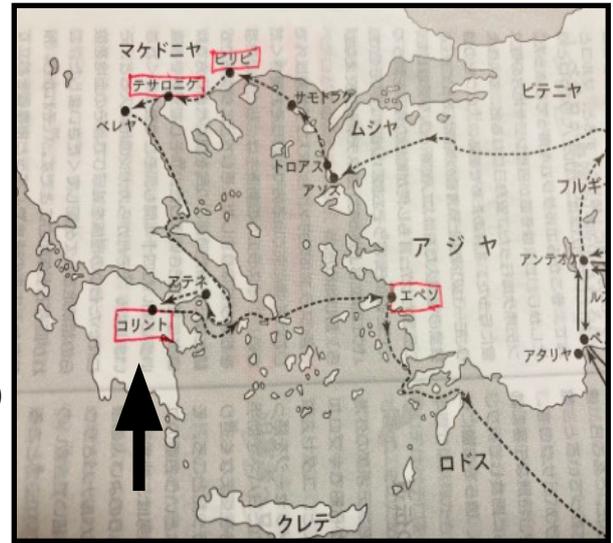
## 1 コリント教会への手紙のアウトライン

## A：教会の問題についての対処

- (1)教会の分裂について(1章10節～4章21節)
- (2)教会の無秩序な状態について(5章1節～6章20節)

## B：教会の質問に答える

- (1)クリスチャンの結婚に関する教え(7章1節～40節)
- (2)クリスチャンの自由に関する教え(8章1節～10章33節)
- (3)礼拝に関する教え(11章1節～14章40節)
- (4)復活に関する教え(15章1節～16章24節)



## 「コリント教会へのパウロの手紙」を読んでみよう

## 1 今日の聖書箇所：10章14節～33節

## 2 今日のポイント：何をしても自由だが、全部が益になるとは限らない

## (1)前回までの復習

パウロは10章の前半で、信仰の先輩であるイスラエルの民を思い起こすようにコリントの人々に語りかけました。彼らは出エジプトの際、大きな恵みを創造主から受けました。荒野の中を雲の柱・火の柱を通して導かれ、海をくぐって約束の地に向けて導かれました。しかし、残念なことに、その途中、イスラエルの民は恵みを忘れ、主に反抗し偶像を拝むなど、創造主に忌み嫌われることを行い、結局、約束の地を踏むことはできませんでした。同じようにコリント教会の人々も、救われる恵みを経験しながら、主が忌み嫌われることをおこなっていました。パウロは、信仰の先輩イスラエルの民と同じ道を歩まないように、コリントの人々に警告しました。

## (2)捧げ物と捧げる行為(14～22節)

パウロは10章前半でイスラエルの民の失敗を語りながら、後半を「偶像礼拝を避けなさい(14節)」という言葉から始めました。偶像礼拝については8章ですでにパウロが語った問題でもありました。ここでパウロは、聖餐式でパンを食べることを通して、クリスチャンといわれる人がキリストに属した人である事を強調しました。そして、偶像礼拝をすることは、悪魔に属することだと語り始めます。8章では、偶像に捧げられた「捧げ物」が問題となりました。8章でパウロは偶像はただの像であるので、そこに捧げた「捧げ物」には何の悪の影響もないので、食べても差し支えないと語りました。ここでは、「捧げ物」に注目しているのではなく、「捧げる行為」に注目しています。20節で「偶像に捧げる物は、実は悪例に捧げるのであって、私はあなたがたがそうすること(偶像に捧げる行為)によって、悪霊と交わって欲しくないのである」と語りました。また偶像を礼拝する事を「悪魔の杯を飲むこと(21節)」「悪霊のパンを食べること(21節)」と語り批判しました。当時のコリント教会では23節で言及されている通り「何をする事も許されている」を拡大解釈(自分の都合の良いように解釈)し、偶像に捧げられた

食べ物も自由だったのだから、異邦人が偶像に食べ物を捧げる行為に参加しても良いのではないかという誤解が広まっていたのです。偶像自体は何の力もない置物ですが、それに食べ物を捧げる行為は偶像礼拝にあたります。その背後には悪魔がいるからです。ですから、パウロは、聖餐式を通して、キリストと一つとなった者が他の神を拝む事を通して、偶像と一つになってはならないと語りました。

### (3)自由は他の利益のために用いよう(21～33節)

パウロは21節で、コリント教会のモットーでもあった「自由」から語り始めました。コリント教会では「全てのことはしても良い」という自由をモットーとして歩んでいました。しかし、ここでパウロはそのモットーに忘れられている大切な事を語りました。それは「全部が益になるとは限らない」パウロは今まで権利や自由が与えられていても、他人の益にならないならそれを行わない自由を行使してきました。ですから、パウロはここでも、クリスチャンには「自由」があるけれども、それを自分の益のために用いるのではなく、他人の益になるのか、共同体の益になるのかという視点で考えなさいとコリント教会の人々に問うています。

その具体例としてパウロは再び「偶像に捧げられた肉」について言及しました。食べ物自体に問題は無いので、それを知らずに食べてしまっても問題ありませんし、わざわざ詮索する必要もないとパウロは語りました。ただ相手が「偶像に捧げられた肉です」と教えてくれた場合には、相手の配慮を大切にせずして食べない方が相手の良心を傷つけずに、相手の益になると語っています。

そして、最後に「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何事をするにも創造主の栄光を現すためにすべきである(31節)」とまとめました。食べること飲むこと、人として基本的にしなければならないこと、1つ1つも自分の為だけに！という事よりは、主の為に、ひいては他人の益の為に生きていく姿をパウロは説いています。

## 3 分かち合ってみましょう

クリスチャンになると「～してはいけません」という禁止事項が増えていきそうな気がしますが、実はクリスチャンは何をしても自由ですが、パウロが語るように、それが主の栄光にならない、もしくは罪になるので行わないのです。パウロが語ったように偶像への捧げ物に何も問題はなくても、その行為は大きな問題となる場合があります。私たちも文化の中でやってしまっている事で、偶像礼拝と関係してしまうことは多数あります。その文化の中に暮らすクリスチャンとして自由はあるかもしれませんが、それが主の栄光の為になるかという判断を持って、行動していきたいものです。